2018 4/10
No.2064
毎月第2・第4火曜日発行

政経かながわ

一般社団法人
—神奈川政経懇話会—

平塚市寺田縄の県立花と緑のふれあいセンター「花菜ガーデン」で、チューリップやヒヤシンスなどが咲き誇っている。1100平方メートルの大花壇では、61品種約10万7千球が植えられている。入園料は、大人520円など。問い合わせは、花菜ガーデン電話0463(73)6170。

神奈川新聞社

政経かながわ

2018 4/10 No.2064

contents

視点・点描 3
岡崎元県知事の死に思う

講演録 4
「ポスト真実」の時代をどう生きるか
政治学者、東大名誉教授　姜　尚中

経　済 8
市民が農業政策の形成に参加
ドイツの「緑の週間」リポート

社　会 10
企業は積極的にICT活用を
働き方改革を進めるために

経　済 12
シリーズ“はじめの一歩”
「日銀の金融政策」その②～欧米編

企業最前線 14
ハイテク製品の「余生」に道
炭素繊維、太陽光パネル再生

くらし2018 16
自宅担保に老後の生活資金

広告珍談 18
広告はたのしい⑥1
航海の神さま

NNAアジア経済リポート 19

事務局だより

◇2018年5月定例講演会
2018年5月16日（水）
午後1時30分～3時
崎陽軒本店4階「ダイナスティー」
講師は共同通信社前平壌支局長の磐村和哉さん
演題は「急変する朝鮮半島情勢／南北-米朝首脳会談の評価と展望」

視点描

岡崎元県知事の死に思う

元神奈川県知事の岡崎洋さんが3月末に亡くなった。2年ほど前に体調を崩して介護を受けながら施設で暮らしていた。勇退から15年経つが、政財界や民間から惜しむ声が相次ぎ、あらためて存在感の大きさを痛感した。

岡崎さんは県立湘南高校、東大経済学部を経て1954年に大蔵省に入省。大臣官房審議官や環境事務次官を歴任した。

5期20年務めた長洲一二氏の引退を受け、与野党5党に担がれた95年4月の知事選で初当選。未曽有の財政危機に直面し、知事の期末手当全額返上や給与カットなど「身を切る改革」を率先、徹底した行財政改革を進めた。藤沢の自宅から毎日電車で通勤するなど清廉さが際立った。

「公僕」の姿勢を徹底し、派手なパフォーマンスとは無縁だった。しかし、全国で初となる都道府県直営のボランティア交流拠点の開設、ボランタリー活動推進基金21の創設や、県立保健福祉大の設立など、社会の変化を見据えた先見の明があった。「環境立県」を打ち出し、水源環境保全の新税導入にも道筋を付けた。

私は岡崎県政2期目の2001年秋から03年春に退任するまでの間、県政クラブの記者として日々岡崎さんと接していた。強く印象に残っているのは、厳格さだった。当時の副知事が「自分自身にも職員にも厳しかった。『そういうことじゃ納得いかない』と指摘され、震え上がったこともあった」と振り返ったが、何より、自分自身に厳しかった。

岡崎さんの厳格さを思い出したのは2009年。2度目の県政担当となったときで、岡崎さんが勇退してから6年近く経過していた。県立高校生11万人分の個人情報がインターネット上に流出していた事態が発覚。県教委は生徒らに謝罪したが、適用できる法律がないケースだったことなどから、県教委の幹部は非公式の場で「県としては、やりようがない」と口にしたのだ。

流出情報には中退や生活保護などに関する内容も含まれていた。岡崎県政下なら、幹部職員からそのような言葉を聞くことはなかったと思う。この件以外でも、日々の取材を通し、県行政が弛緩したように感じることがあった。

さらに10年近く過ぎ、県政は今、どうなっているのか。岡崎さんの思いが継承され続けることを、切に願う。

（神奈川新聞社報道部長　渋谷　文彦）

広告珍談　広告はたのしい㊶

宮野　力哉

航海の神さま

コンピラフネフネ、おってにほかけて、シュラシュッシュ……と幼いころ、歌ってた。フネが身近にある、大阪のウツボに住まっていたからだろう。《金比羅船船》という民話。香川県の琴平辺りで歌われた、お座敷唄という。

大きくなって、船旅をするようになった。

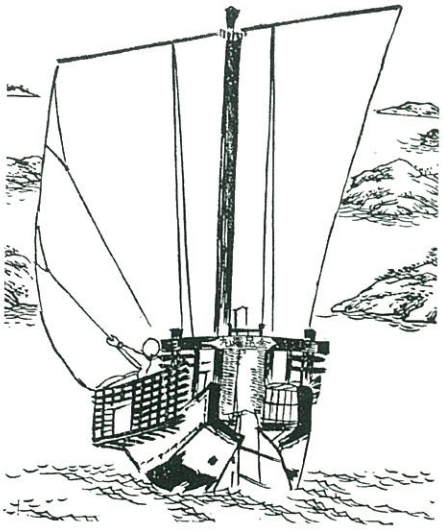
長い航海だと操舵室、つまりブリッジの見学会がある。フネが進んでいく、きらきらしたすばらしい眺望。うしろを振りむくと、「金比羅さん」が祀られている。讃岐の金刀比羅宮の御札である。

コンピラは金毘羅とも、金比羅とも書く。金比羅はサンスクリット語（古代インドの文章語）でkumbhira、鰐魚のこと。インドのガンジス河にすむワニが神格化され、仏法の守護神になった。薬師十二神将のおひとりで、宮毘羅大将とも、金毘羅童子にもあたるとか。金比羅さんは海の神さま、水の神さまとして古くからうやまわれた。江戸時代、西まわりや東まわり航路が開発。海上安全と海難救助をねがって、ますます信仰された。本州から讃岐へ「金比羅船」もひんぱんに行き来した。

図は《金毘羅参詣名所図会》に描かれたフネ。船尾に「金比羅丸」と読める。これにまさる広告はない。

瀬戸内海を航行する船乗りは、丸亀や多度津辺りにくると、おさい銭をタルに入れ、船名を書いた小旗をたてて海へ流す。近くを通りかかったフネは「流し樽」を見つけると、金比羅さんにとどける風習は、いまも残ってるそうだ。

関東や東北の人は、遠くてお参りできない。代わりに飼い犬の首に、おさい銭とえさ代を入れた袋をつけて、旅人に託す。宿場でべつの旅人に引きつがれ、また引きつがれて、犬は金比羅さんへお参りできた。帰りにはご利益の御札を持ちかえった。「金比羅犬」という、ほのぼのした庶民信仰もあった。



船大工の末えいであるボクは、金刀比羅宮へなんどか参拝した。そして円山応挙や伊藤若冲が描いた、壮麗な障壁画に魅せられる。持ち船が無事帰還した成り金が、著名な画家に描かせ、おかげさまでと奉納したのだろう。

境内の「高橋由一館」へも行く。黎明期の洋画家由一は、洋画普及を支援してと金比羅宮に依頼。それがきっかけで1879（明治12）年、琴平山博覧会の開催。琴平に滞在した由一は多くを制作、金比羅宮に収蔵された。

琴平町には、現存最古の芝居小屋「金丸座」がある。1835（天保6）年の建造。金毘羅大歌舞伎の興行。タタミ敷きのマス席、手動のまわり舞台。花道もあって、家人がロッポウ、踏んでたのしかった。

（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）

（図）「金毘羅参詣名所図会」より、金比羅参宮のフネ